

「月に命を宿す」

島根県 地久寺副住職 榎本 淳道
ちぎきゅうじ くしもと じゅんどう

ある日の夜、お寺の電話が鳴りました。それは、お檀家さんの訃報でした。私はすぐにお宅に伺いました。お勤めを終え 帰る私を、ご長男と5才のお孫さんが見送ってくださいました。その日は満月の夜でした。月を見上げたご長男は「父は月や花、木々など自然を愛する人でした」と話されました。それを聞いた私は、お孫さんに「これから先、おじいちゃんはお月様のような優しい光で君を見守り続けて下さるよ」と話しかけました。お孫さんは少し不思議そうな顔をしながら頷いてくれました。

それから数か月が過ぎたある日、そのお宅に月命日のお勤めで伺った時、ご長男はこんな話を聞かせて下さいました。「先日の十五夜で息子とお月見をしていた時、急に息子が月に向かって手を合わせたんです。ブツブツ何かを言っているのです、よく聞いてみると、『おじいちゃん、元気にしていますか。これからも僕たちを見守っていてね。なむなむ』と言って頭を下げたんですよ」と。

どうやら男の子は、“月のような優しい光で、見守り続けて下さる”という私の話を覚えていて「月におじいちゃんがいる」と一生懸命手を合わせていたのです。この先、お孫さんが困難に直面した時、お月様におじいちゃんを感じきつと手を合わせることでしょう。それはお孫さんにとって大きな支えとなり、力を与えてくれるはずです。またお孫さんに嬉しいことがあった時にもおじいちゃんと共に喜んで下さり、その喜びは倍増するはずです。

しかし、いくら優しく月夜が照らしてくれても、そこにおじいちゃんを拝む心が無ければただの月の光です。「手を合わす心におわす仏様」古くから云われるように、真心から手を合わせた時に拝まれた対象物は仏となり、拝む私たちにも仏様が宿るのです。月に命を宿し、仏様の心で繋がったおじいちゃんとお孫さん。これからも、お孫さんの大きな支えとなることでしょう。